

團琢磨一。大牟田に住む私たち市民は、一体どれほど知っているのでしょうか。

小学校の副読本『私たちのおおむた』を見ると、一九六〇年代には、「團琢磨という人が大牟田に来て……」として團が見た当時の大牟田の様子を紹介されています。しかし團が見な人物かの記載はないのです。七〇年代以降、二〇〇七年までは團の記載はなく、二〇一二年になつてやつと『大牟田の発展につくした人』と紹介されました。だからほとんどの市民は知らない『教えられなかつたのです。團こそが、今に続く大牟田の礎を築いた』という事実があるのに、です。

# 團琢磨 理もられた 郷土の英雄

## —大牟田の礎を築き、『世界遺産』を残してくれた—

大牟田から日本経済のリーダーに

三池炭鉱の将来を担う坑と期待されながら多量の出水で水没・廃棄の瀕戸際だった勝立坑に、團が最後の望みを託しデービィーポンプを導入し、成功させたからこそ、その後の宮原坑・万田坑へと続き、三池は日本の炭鉱となりえたのです。三池港建築、コンビナート建設、専用鉄道の敷設なども團が指揮をこつて成した実績でした。

『じがしこでん』3号では、炭鉱が閉山しても「街が、人が生きていく基盤にと考え三池港を作り、化学工業を根付かせた先人たち……』として團と牧田環を紹介しました。

こうして大牟田で炭鉱の開発・経営、化学工業の育成、地域作りなどに技術者・経営者として卓越した才能を開

花させた團は、やがて三井財閥の総帥となり、一九三三年（大正十二年）に日本経済聯盟会（日本経済団体連合会の前身）を設立、理事長、会長を務めるなど名実ともに日本経済界のリーダーとなるのです。

しかし一九三二年（昭和七年）三月五日、團は東京日本橋で血盟団の菱沼五郎が放つた凶弾に斃れます。上海事変、満州国建国、五・五事件と同年の出来事でした。翌年一月にはドイツにナチス政権が誕生しています。團を斃した銃声は、世界秩序の崩壊と日本が国際社会から孤立して暗黒の時代に突入していく合図のように思えて仕方ありません。

成長日本の先頭を走り抜いた

一八五八年（安政五年）、福岡藩士の男として生まれた團は、一八七二年（明治四年）、十五歳で新政府の岩倉使節団に同行して渡欧・渡米して留学。マサチューセッツ工科大学鉱山学科を卒業して帰国し、東大助教授などを経て、まだ官営だった三池炭鉱に技師として大牟田に着任しました。そして71歳で凶弾に斃れるまで、團は開国から産業革命を経ての近代国家、さらに帝国主義列強に伍するほどに成長していく日本を、その先頭で走り抜いたのではないでしょうか。

團が残した三池港や炭鉱関連の遺跡は九州・山口と関連地域に盛り込まれ、世界文化遺産登録に向けた政府の推薦が正式決定しました。いまだからこそ、團の生涯を知ることで大牟田、日本が歩いた道を見直す意義があると思います。どうぞ『じがしこでん』連載小説『凶弾・小説團琢磨』の後半もお楽しみください。